

# 高齢者の知識と経験を受け継ぐ

年をとるのはイヤですか。でも、今いくら若くても、だれもが必ず老いていくのです。生きていることの結果なので、それが自然です。それならば、若い人もお年寄りもいっしょに、敬老について考えてみませんか。





# 「敬老の日おめでとう」「

今年、還暦を迎える中井繁一さんは、  
妻の澄子さんと二人暮らしです。

「そろそろ十五日、敬老の日だな」

「あなた、去年から祝日法が改正されて、今年は二十日ですよ」

と澄子さんが、カレンダーで確かめながら言いました。

「ああ、そうだったな。敬老の日は九月の第三月曜に変わったんだ。確か『ハッ

ピーマンデー法』とか言ったかな」

「そういえば、正一から連絡があつて、敬老の日には子どもを連れて顔を見せに来ると言っていましたよ。久し振りに賑やかになりますね」

「そうか、それは楽しみだ」

◇ ◇  
敬老の日。長男の正一さんと英子さん一家がやつてきました。

「おじいちゃん、おばあちゃん、敬老の日おめでとう。ハイ、これプレゼント！」  
家の上がるとすぐに礼子ちゃん（5歳）





が、繁一さん夫婦の似顔絵にがおえを差し出しました。それを受け取った二人は、孫まきの顔とその絵を見ながら、思わず笑顔がよがこぼれます。

「ご無沙汰ぶさたしてます。相変わらずお元気  
そうで何よりです」と英子さん。

「ありがとう。でも、このまえ電車で席  
を譲ゆずられてね。そんなにも年寄としよりに見え  
るのかと、ちよつとがっかりしたよ」  
と繁一さんがぼやきました。

「それは自分が年をとっていることを認  
めたくないだけじゃないの……」

澄子さんのひと言に、繁一さんも思わ  
ず苦笑にがわらい。礼子ちゃんもおじいちゃん  
とおばあちゃんの笑顔を見て、ニコニコと  
笑っています。いつもは静かな中井家  
も、今日はとても賑やかです。



# 敬老の日の由来

「それにしても、ハッピーマンデー法のおかげで連休が増えたのはありがたいけど、祝日が毎年ころころと変わるのもどうかと思うよね。祝日の日付に意味があると僕は思うんだけど……」

居間でくつろいでいた正一さんが何げなくそう言うと、繁一さんが言葉を続けました。

「実は、私も前から同じように感じていてね。最近始めたインターネットで敬老の日の由来を調べたら、それが面白いんだよ」

「そういえば、お義父さん、インターネットにはまつているそうですね。私なんか何もできないのに、すごいですね」英子さんの言葉に、繁一さんは少し得意げなようすで、「敬老の日」の由来について説明を始めました。

——敬老の日の始

まりは、聖徳太子が四天王寺に悲田院を建立した日であるとか、元正天皇が岐阜県の養老の滝に行幸



※悲田院：身寄りのない貧窮の病人や孤老を收容する救護施設。「悲田」とは慈悲の心で哀れむべき貧窮病人などに施せば福を生み出す田となるの意。



された日であるという説があります。しかし、どちらも確かなものではなく、現在では兵庫県野間谷村（現・八千代町）の門脇政夫村長が提唱した「としよりの日」がその始まりだと言われています。

これは「お年寄りを大切にし、お年寄りの知恵を借りて村づくりをしよう」と、農閑期で気候もよい九月十五日を「としよりの日」に定め、昭和二十二年に敬老会を開いたのが始まりのようです。

その後、昭和二十五年から兵庫県全体で行われるようになり、次第に全国に広まったといえます。そして、昭和三十九年にこの「としよりの日」が「老人の日」と改称され、昭和四十一年に、「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」という目的で、「敬老の日」

という名称で国民の祝日として定められました——



「思ったよりも新しいのね」

澄子さんは意外な表情を浮かべました。

「地方の一行事から全国に広がっていったなんて、そのころは積極的な敬老の動きがあったんだね。僕も初めて知ったよ」

「世の中には、知っているようで知らないことがたくさんあるんですね」

正一さんや英子さんも、繁一さんの話には少し驚いたようです。





# 老人を大切に する

## 「姥捨山伝説」

繁一さんの話は続きます。

「それよりも興味深かったのが『姥捨山伝説』の話だよ」

「姥捨山伝説って、お年寄りを山に捨てるっていう話ですか」

英子さんが聞き返しました。

「そう、実は、その話はね……」

繁一さんは、得意満面<sup>とくいまんめん</sup>でまた話し出しました。

——「姥捨山伝説」にはいくつかの話があり、その伝説は世界の各地にも残っています。グリム童話集<sup>どうわしゅう</sup>には「年とつたじ

いさんと孫」という姥捨て伝説に通ずる

話、また、インドや中国にも姥捨ての伝説があります。これらに共通しているのは

「敬老」という精神文化の重要性が強調されていることです。

「姥捨山伝説」は、普通、次の四つのタイプに分けられます。

### ① いずれだれもが老人になる

ある男が六十歳になった親をモッコ<sup>※</sup>に乗せ、小さい息子<sup>むすこ</sup>に片棒<sup>かたぼう</sup>をかつがせて山の奥へ捨てに行きました。親を山中に置いて帰ろうとすると、その息子が父に

※モッコ：ワラ縄で網状に編んで四隅に吊紐をつけて運搬に使うもの。

「このモッコは家に持って帰りましょう。やがて必要なときがくるから」と言います。それを聞いた男は、モッコがやがて自分のときに使われることを悟り、親を捨てることをやめて戻りました。



## ② 老人は優れた知恵を持っている

昔、ある国の

王が老人不要を唱え、老人を捨てるように命令

しました。とこ

ろが一人の孝行

息子は、床の下

に親を隠してい

ました。あると

き、王は敵国から難題を吹きかけられて

困っていました。孝行息子は、その難題

を親に相談すると、親は簡単に解決して

くれたので、答えを王に申し出て、褒美

の代わりに親を手元に置けるようお願い

しました。王は老人の知恵が優れていること

を悟り、以前の命令を取り消しました。





### ③ 子を思う親の深い愛情

捨てられる母親が、息子に背負われて行く途中、小枝を折って落としていきます。息子はそのわけを聞くと、「おまえが家に帰るときに道に迷うとかわいそうだから、目印に



なるように落としてい  
るんだよ」  
と答えまし  
た。息子は  
その情愛に  
感動して親  
を連れて帰  
り、末長く  
共に暮らし  
ました。

### ④ 意地悪な嫁と心優しい夫



老母を養っている息子夫婦がありました。意地悪な嫁は姑を追い出そうと夫をそのかします。心根の優しい夫は仕方なく母親を山に置きますが、耐えら

れなくなり、ついに迎えに行きます。  
姑は心がけのよい人だったので、山の神の加護で望外の宝物を得ていました。  
連れ帰った母親の話聞いて、嫁はその幸運にあやかうと、夫に自分を山中に捨てさせますが、かえってひどい難儀を受けて死んでしまいました――

「そうですか。私は『姥捨山伝説』はてつきり老人を捨てる話だと思っていたけれど、そうではなくて、お年寄りを大切にすることを説いた話だったんですね」

英子さんが言うと、正一さんが言葉が続けました。

「でも、このごろは年老いた親を老人養護施設に入れっぱなしで、ろくに見舞いや訪問にも行かない家族がいると聞くけど、これじゃまるで現代の姥捨山だ。」

家族一人ひとりの心の中に、年老いた親の心に寄り添ってあげるような優しさがあれば、家族の関係もきつと変わると思うんだけどな」

「そうね、それに街で困っているお年寄りがいてもみんな知らん顔……。そんな光景もいたるところで見かけるわ。でも

「もし自分のおじいちゃんやおばあちゃんだったら……。」と思えば、困っているお年寄りにひと声かける優しさも生まれるんじゃないかしら」

英子さんのこの言葉に、正一さんもう



なずいています。

「私は〃現代の姥捨山〃なんて絶対嫌ですよ。もし正一や英子さんから冷たくされたら、どうしましょう」

澄子さんがいたずらっぽく言うのと、

「何バカなこと言ってるんだよ。今は離れて住んでいるけど、僕たちは父さんと母さんを大事にするから、心配しなくていいよ」

と笑顔で答える正一さんでした。

「正一、ありがとう。でも、まだまだ若い者の世話にはならんよ！ なあ、母さん」

「ハイ！ そうですね。まだまだ元気です。がんばりましょう、あなた」

繁一さんと澄子さんはお互いに顔を見合わせて、明るく微笑みました。

そんな敬老にまつわる大人たちの話によそに、礼子ちゃんはテーブルの上に出されたジュースやお菓子を口いっぱいにおぼつて、すっかりご満悦。中井家の敬老の日は、こうして穏やかに過ぎていきました。



# 高齢者の 知識と 経験は 「宝」

「敬老」とは、文字どおりお年寄りを敬うことです。が、中井さん一家の話題の中で出てきた「敬老の日の由来」や「姥捨山伝説」の話には、高齢者に対するいたわりと尊敬の心と

ともに、その経験や知識から学ぼうとする先人たちの積極的な思いが感じられます。この思いを受け継ぐかのように、高齢者の貴重な経験や知識を生かして、よりよい社会づくりを行おうという取り組みが各地で増えてきました。次にご紹介するのは、そうした取り組みの一例です。

——成田市在住のYさん(67歳)は、成田山新勝寺たきんしんしょうじなどの市内の観光案内を務める「シルバーボランティアの会」に所属しています。Yさんは、自分が生まれ育った町を多くの人に知ってもらいたいという思いから、成田市のボランティアの募集ぼしゅうに応募おうぼしました。現在、メンバーは四十数名。月に二、三回、観光客の案内をするそうです。

「成田は外国の観光客が多く、歴史の勉強だけでなく、語学の勉強も必要です。それに町中を案内して歩くので体力もつき、自然と活力が湧わいてきます。何より皆さんに喜んでいただけることが、いちばんうれしいですね」と、Yさんはにこやかに語ります。



—平成十四年、長年モラロジーによる道徳教育活動に尽力されてきたSさん（69歳）は、市の教育委員会から公立学校特別非常勤講師に任命されました。そして、市内の小学校からの招きに応じて、五・六年生を対象に道徳の授業を行いました。

Sさんは子どもたちに、命のつながりや親、祖先のありがたさについて自分自身の体験談を交えながら話し、「皆さんは見えないところでたくさんの人にお世話になり、その『おかげ』で毎日の生活が送れるのです。ありがたうの『感謝』、すみませんの『反省』、はいという『素直な気持ち』を忘れないでください」「当たり前だと思ふことに感謝する人になつてくください」と、心を込めて語りかけました。



授業を終えたSさんは、「私が一方的に話しましたが、みんな静かに聴いてくれました」と、ほっとした表情を見せていました。

§ §  
その他にも、多くの市町村が老人クラブやサークル活動を推進したり、小・中学校においても、児童や生徒が授業の一環として近隣きんりんの高齢者の体験談を聴いたり、伝統芸能を直接に教わるという取り組みが増えてきました。まさに高齢者の知識と経験は、若い世代にとって人生の「宝」そのものなのです。

こうした社会の動きは、「としよりの日」を呼びかけた門脇村長の「お年寄りを大切にして、お年寄りの知恵を借りて村（社会）づくりをしよう」という提唱そに沿ったものと言えるでしょう。さらに、よりよい社会づくりに貢献する機会を高齢者に提供するとともに、その生きがいにもつながっていくものです。

# 「敬老」は「継老」

高齢者は、国や地域の伝統や精神文化を伝え、祖先からのいのちを今に受け継いでくれたかけがえない存在です。同じように、若い世代もその精神を受け継ぎ、未来に伝えていく大切な存在です。

私たちは、老いも若きも安心して老いていける心豊かな長寿社会を築いていきたいものです。そのためにも、高齢者を家族の一人として尊重するだけでなく、「社会の中かけがえない先輩」として敬い、その人生の知恵と経験（宝）に学び、次世代に生かしていくことを忘れてはならないと思います。

その意味で、「敬老」とは「継老」老人が持つ宝を継ぐこと」であるとと言えるのではないのでしょうか。

